



Title	加藤九祚先生を偲んで
Author(s)	ピタバロヴァ, アセリ; BITABAROVA, Assel
Citation	日本中央アジア学会報, 13, 83-89
Issue Date	2017-07-31
DOI	https://doi.org/10.14943/jacas.13.83
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/88306
Type	journal article
File Information	JB013_017bitabarova.pdf



加藤九祚先生を偲んで

ビタバロヴァ・アセリ

「カラテパ発掘のうた」より
アムの流れはこがね色
カラテパ土はほとけ色
空とぶ鶴にこたえつつ
カニシカ王の御寺掘る
(作詩は加藤九祚、作曲は大滝宣隆)

考古学者・民族学者で翻訳家の加藤九祚先生が日本時間2016年9月12日未明、発掘のため訪れていたウズベキスタン南部・テルメズの病院で死去された。享年94歳。先生の生前のご功績を偲び、謹んで哀悼の意を表す。

『遊牧民』がもたらした出会い

加藤先生の名前を初めて知ったのは、恥ずかしながら、先生の手になる翻訳『遊牧民』が出版された2012年1月である。『遊牧民』は、カザフスタンの著名な作家I. エセンベルリンの大作で、内容は15世紀から19世紀半ばまでのカザフ草原の歴史を描いた、三部からなる歴史小説である。加藤先生は、M. シマシコ訳によるロシア語版から、そのうち第一部「呪われた剣」を翻訳した。この小説は、いうまでもなく、日本語に翻訳されているごくわずかな中央アジア文学作品の一つである。私は中央アジアの国際関係を専攻しており、加藤先生と研究上の接点は少ないものの、日本留学中のカザフ人として、『遊牧民』翻訳のニュースを聞いて大変うれしく思い、いつかその気持ちと感謝の意を加藤先生に直接伝えることができればという思いを抱いていた。

幸いなことに、私の願いはまもなく実現することになった。当時、北海道大学スラブ・ユー

ロシア研究センターに、日本人抑留問題の研究に携わっていたロシア科学アカデミー民族学・人類学研究所のエリザ＝バイル・グチノヴァ先生が滞在された。彼女はよく私に日本人抑留者のラーゲリ体験について話してくれた。そして、実は、加藤先生とは長年の付き合いだった。本書の出版からおよそ2ヶ月経った頃に、グチノヴァ先生のご紹介のおかげで、私は加藤先生と電話で直接会話を交わし、先生に感謝の意を表すことができた。この貴重な機会をいただいたグチノヴァ先生に、この場を借りて深く御礼申し上げる。当時は高名な碩学の加藤先生に初めて電話で話すことに緊張感を抱くと同時に大きな喜びを感じたのを、今もよく覚えている。しかし電話の向こうから聞こえてきた加藤先生の声は明るく、真っ先に緊張感をほぐしてくれた。私は、先生に感謝の気持ちを伝えたいと、なぜこの作品を翻訳したかをうかがった。加藤先生は、「2001～2004年の間、『アイハヌム』という雑誌にバラバラに発表したもの(第一部第一章)をまとめたいと思い、このたび、それに第一部第二章の翻訳を加え、「呪われた剣」を一冊の本として出すことができた」と答えた。

私は、個人的には、『遊牧民』の登場人物——ハン、アクンやジュラウ(詩人)、バトゥル(勇士)など——の外見描写とともに彼らの意識や性格をあらわす記述に対して最も興味を持っている。「呪われた剣」は、カザフ＝ハン国の建設過程を、歴史上の偉大な人物(アブルハイル・ハン、ジャニベク・ハン、ケレイ・ハン等)と伝説的な人物(アサン・カイグ等)とのエピソードを中心に、鮮やかに描き出している。そして、本書では「アイトゥス」(アクンたちの競技)、「トルガウ」(歴史的な出来事について歌う詩)や詩などの口承文芸が盛んに用いられている。加藤先生のおかげで、私はこれらの詩の日本語版を読むことができ、またその文語の雅やかさに魅かれてしまった。後になって知ったのだが、先生自身も歌詞や詩を書くことが好きだった。

加藤先生は、翻訳だけにとどまらず、著者のエセンベルリン氏について探り、彼の性格や人生の節目となった出来事や家族・知人との関係等を、細かな点に配慮しながら紹介する小論文を書き加えている。その中では以下の記述が特に私の注目を引いた。

私は思うに、イリヤスの歴史小説における成功の陰には、彼の親友の歴史学者・考古学者マルグランの力が大きな役割を果たしたと思う。マルグランは、著者が本書執筆にさいして古文書だけでなく、カザフ人についての歴史、考古、民族学の最新の研究成果および口承、伝承を広く取り入れたとのべている。私は半世紀前にマルグランに会い、自宅に招かれたことがあるが、実にすばらしい人物だと思った[エセンベルリン 2012: 496]。

私はこれを読んで思わず心が温まった。なぜなら、私が育った家が、加藤先生の友人、考

古学・歴史学・民族学などの多岐にわたる分野で活躍していたアルケイ・マルグラン氏の名前を冠した通りにあったからである。これに関連する話だが、私が小学3年生だった頃の次のエピソードを鮮明に覚えている。1993年9月、家族とともにバヤナウル村(パヴロダル州)にある母親の実家に引っ越した。その時、特に目を引いたのは、祖母が住んでいたこの古い家の壁に「マルグラン通り63号」という新しい住居番号表示板が取り付けられたことであった(その以前は「エンゲルス通り63号」のプレートだったが)。マルグラン氏が同地域出身者だったため、こうして街の通りの一つに、彼の名前を冠して彼の栄光をたたえ、地元の人々の敬意を表したのだ。このことを加藤先生に伝えていたら、きっと喜んでくださっただろうに……。

シベリア抑留体験と研究者への歩みだし

『遊牧民』翻訳の発行当時は、加藤先生は90歳だった。これまで半世紀以上にわたって現代史・民族学研究に専心されてきた先生は、驚くほど数多くの優れた研究成果をあげてきた。しかし、先生の研究者に至るまでの道のりは容易ではなかった。

朝鮮慶尚北道出身の加藤先生は山口県で育った。1944年1月に応召し、陸軍工兵学校を経て、満州へ出征。1945年8月に敗戦により、満州でソ連軍の捕虜となった。それからの4年8ヶ月はシベリアの収容所で過ごした。このシベリア抑留が、加藤先生のその後の歩みに決定的な影響を与えた。

先生の捕虜体験が、著書『シベリア記』(潮出版社、1980)と *Сибирь в сердце японца* (Новосибирск, 1992) に記されている。このうち後者のみを読ませていただいたのだが、本書が語るエピソード——写真家の都築小三治のシベリア滞在経験、強制収容所で起きた残酷な出来事、ポリシェヴィキのF. N. ムフィンと諜報活動家だった石光真清の間の友情関係、加藤先生の考古学者A.P. オクラドニコフとの思い出等——は、まさに著者自身の人間としての生き方や人間関係についての考えを反映していると思う。またこの本は、私が知っている限りでは、ロシアで出版された日本人のソ連抑留問題についての最初の本であり、その後の研究が発展する出発点となった。

加藤先生は帰国後上智大学に復学した。大学卒業後平凡社に入ったが、最初の5年間はアルバイトとして働いていた。そこで、先生は、自分の抑留体験を活かし、シベリアをフィールドにした研究をしようと考えた。こうした「勉強すれば資格が得られる」という考えが先生の研究活動の出発点となった。興味深いことに、1957年に同社出版の『世界文化地理大系』に掲載された、先生の最初の著作は、高名な中央アジア探検家N. M. プルジェヴァルスキーについての論文だった。中央アジア旅行の途中で病気にかかり最期を迎えたプルジェヴァル

スキー氏はまさに、加藤先生にとっての鏡だった。これについて、加藤先生はこう述べている。「自分の好きな仕事に奉仕することは彼の人生の意義になった……この素晴らしい人物の生涯は、私にとって模範となり、自分が将来どの道を進んでいくのかを決めるのに役に立ったのだ」[Karo 1992: 95]。そして、最期においても、先生は鏡であったプルジェヴァルスキー氏の人生の終え方に倣った。

「ニュー」を求めてカラテパへ

中央アジアに関して、加藤先生は『シルクロードの十字路口——中央アジアの昔と今』(1965)、『中央アジア遺跡の旅』(1979)、『ユーラシア野帳』(1989)、『中央アジア北部の仏教遺跡の研究』(1997)、『シルクロードの古代都市アムダリヤ遺跡の旅』(2013)等数多くの著書を出版してきた。さらに、中央アジアの歴史や文化や文学を日本に紹介する目的のもとに、先生は2001～2012年の間に年一冊のペースで加藤九祚一人雑誌『アイハヌム』を刊行していた。

加藤先生は60代に入ってから考古学に関心を持ち始め、そして75歳頃から最期を迎えるまでの約20年間はウズベキスタンで仏教遺跡の発掘調査に従事していた。その前は、短期間ではあるが、クルグズスタンで仏教遺跡の発掘に携わったことがある。この歳になってまた新しい分野に挑戦し、テルメズで長年調査を続けてきたことが、「他人のやらない新しいことをやれ」というソ連の東洋言語学者・民族学者のニコライ・A・ネフスキー氏からの教えにつながっていると、先生は述べている[加藤 2011: 364]。またこの「ニュー」を求める精神について、加藤先生の自作和歌「中央アジア雑感」が、作者の万感の思いを込めて、こう綴っている。

半世紀経てなほシベリア想いつつ熱砂の下に仏跡掘る日々
学問に「ニュー」もたらさんとわれ願ふしよせんこの世に永遠はなけれど
五十度の暑さに耐えて掘りゆかば「ニュー」得られんと思ひてはげむ[加藤 2001: V]。

しかし、こうして苦難に満ちた発掘作業が先生の晩年の最大の楽しみでもあった。彼はカラテパの遺跡について語るのが好きだった。先生が発掘作業に取り組んでいた時の様子が、次のような記述には非常に鮮やかに描写されている。

遺跡を回るたびに、しばしば、そこを掘った時の思い出が頭をよぎる。あそこでは狭い穴で腰をかがめたので、ひどく腰が痛くて情けなかったとか、「掘っては掃き」を繰り返しても、さっぱり日干煉瓦が出ずに困ったとか、アーチ式の煉瓦組みだったの

に、それに気づかず遺跡を傷めたとか、蓮花文様ではないのに、割れ目をハスと思いこんで恥ずかしい思いをしたとか、さまざまな過去のシーンが甦る。私が自分で手鋏を持って働かなかっただら、これらの思い出はなかつただろうから、私の肉体労働の一種の成果とも言えるだろう [加藤 2007: 122]。

加藤先生は、約20年にわたる発掘調査を通じて積み重ねてきた実り多い発掘成果を、日本国内に論文・著書、そして2002年に東京・奈良・福岡で開催された展覧会を通して紹介してきた。2002年にウズベキスタンの故イスラム・カリモフ元大統領は、加藤先生の学界と日本との友好交流に貢献した功績をたたえ「友情勲章」を授与した。

最後の大プロジェクト

加藤先生には一度だけお目にかかったことがある。2015年12月2日、加藤先生の東京の吉祥寺にある仕事部屋（先生が「事務室」と呼んでいたアパート）で先生の貴重なお話を聞かせていただき、気さくなお人柄にすっかり魅かれてしまった日のことだ。その約1ヶ月前に、私は先生のところへ電話を掛けた。2015年10月下旬に安倍首相が行った中央アジア歴訪がそのきっかけだった。なぜなら、この訪問において行われた中央アジア政策スピーチの中で、加藤先生の名前が取り上げられ、先生のご功績が紹介されていたからである。このことを加藤先生に伝えたら、先生はとても喜んでくれた。そして、「アセリさんから電話をもらって本当にうれしい。実は、頼みたいことがあるのだ……」と語り始めた。そこで、私はちょうど翌月初めに東京へ行く用事があったため、その時に先生のところへうかがうことにした。

12月2日の夕方、吉祥寺での約束の場所で私が先生を待っていた。しばらくすると北のほうから杖をつきながら私に向かってゆっくり歩いている加藤先生の姿が見えた。先生は初対面にもかかわらず、全くそれを感じさせない気さくな雰囲気だった。加藤先生と私はそこから先生の事務室に向かってゆっくり歩いていった。先生の仕事部屋に入ると、真っ先に目に飛び込んでくるのがずらりと本が並んだ本棚だ。また、その本棚には写真も何枚か飾られていた——先生と友人との写真だ。先生はその本棚に向かって私に紹介したいある本を探し始めた。しかし、先生はその本をどこに置いたかを覚えていなかった。そして探している途中で探していたものが何だったかを忘れてしまったようだ。加藤先生を思い出すたび、先生の姿に心を打たれたこのシーンが脳裏に甦る。

先生は紅茶とそれに洋菓子を出しておもてなししてくれた。私は、先生がなぜシベリアの研究を始めたのか、そしてなぜ中央アジアに興味を持ったのかについて聞いてみた。先生の人生経験や研究についての興味深いお話を聞きながら、「やりたいことに遅いということは

ない」と思った。その後、話題は先生がここ数年取り組んでいた仕事のことに移った。それはM. アブセイトヴァ (Меруерт Абусентова) ほか編 *История Казахстана и Центральной Азии* (Алматы, 2001) という本の翻訳作業である。先生は「中央アジアの歴史を非常によくまとめた本だ。ぜひ日本語で翻訳出版したい。これはおそらく人生最後の大プロジェクトだ」と語っていた。加藤先生は翌年の夏にアルマトゥを訪れ、本書の執筆者に面会する予定を立てていた。そこで、先生は本書の執筆者と連絡を取ってくれないかと私に頼んだ。著作権の交渉に加え、本書に図版があまり載せられていないため、現地で図を手に入れたいとおっしゃっていた。これが先生との最初で最後の面会だったのだ。



写真 加藤先生の仕事部屋にて
東京、2015年12月2日

2016年8月27日の夕方、加藤先生から「アルマトゥに無事に着いた。大西さんと会った。ありがとう！」と電話が掛かってきた。先生は8月19日に日本からウズベキスタンへ向かった。そこで調査チームと一週間程度観光した後、お一人で27日にお昼頃の飛行機でアルマトゥへ飛んだ。アルマトゥでは9月2日まで私の知人、国際交流基金の日本語専門家の大西由美さんのご自宅に滞在された。先生のアルマトゥでのご滞在中、何から何まで色々お世話してくださいました大西さんに、この場を借りて心から感謝申し上げます。大西さんによると、加藤先生はアルマトゥにいらっしゃった時はお元気な様子で、これからのテルメズでの発掘や翻訳作業について楽しそうに語っていたという。先生は、予定通り東洋学研究所のアブセイトヴァ先生にお会いし、翻訳出版に向けて交渉を行った。そして、昔からの知り合いであるK. バイパコフ先生にお会いし、彼の手助けを得て図版のコピーや撮影を行った。先生は翌年の春にまたカザフスタンを訪ねたいとおっしゃっていたそうだ。

しかし、残念ながら、この願いは叶わなかった。先生は9月2日にウズベキスタンに戻られた後、体調不良により、9月7日にテルメズの病院に入院された。現地時間9月11日23時30分(日本時間:9月12日未明)に加藤先生がお亡くなりになられた。その2週間ほど前に電話で先生の元気なお声を拝聴したばかりで、先生の突然の訃報に接し、ただ茫然としているだけだった。驚きと悲しみに打ちひしがれると同時に、生涯現役を貫かれた先生が発掘現場のテルメズで人生の最期を迎えられ、先生もきっと本望であつただらうと思った。謹んで先生のご冥福をお祈り申し上げます。

参考文献

(邦語)

エセンベルリン、イリヤス 2012 『遊牧民』加藤久祚訳、東海大学出版会。

加藤九祚 2001 「あとがき」加藤九祚一人雑誌『アイハヌム』東海大学出版会、iv-vi頁。

加藤九祚・S. Pidaev 2007 「カラテパ北丘・西(中)丘の発掘(1998-2007)」加藤九祚一人雑誌『アイハヌム』東海大学出版会、59-130頁。

加藤九祚 2011 『元本 天の蛇——ニコライ・ネフスキーの生涯』東京：河出書房新社。

(露語)

Каго, К. 1992. *Сибирь в сердце японца*. Новосибирск: Наука.

(北海道大学大学院文学研究科)